花鳥風月・短歌

秋空を見れば一筋真白な

飛行機雲を指さす子らの手

佐伯　定則

コロナ禍で明けた今年もようやくに

収束の兆見える年の瀬

田中　良子

本年も自粛を決めた秋祭り

法被畳むや折り目をつけて

徳永　誠一

庭に立つ畑はシートをおい被り

黒い地面が秋風誘う

塗塀　良子

白い月丑三つ時に輝けり

覚醒せしを賞賛す

小林泰子

赤とんぼひらり飛び交う畦道を

ひがん花に沿いよろけて歩く

鴻上弥生

公共の施設を借りて趣味の会

コロナの五波でまたもや中止

越智和人

散歩中、ふと、ほうずきがなつかしく

幼きころにタイムスリップ

大橋桃代

瀬戸の魚魚は小ざかなばかりなり

幼き頃は楽しみの山

藤田盛男

いきいきと蛙が遊ぶ農園で

季節の野菜自給するなり

曽我部　福石

火鉢抱くやうに客待つ古書店の

主人に会ひに硝子戸を引く

千歳飴持ち写真撮る境内の

笑顔弾ける真赤な鳥居

小田　和子

冬晴れも楽しポケットにはひとつまだ

温さ持つ焼き芋を入れ

冬の星幾度も数へバス停に

狸のやうな我が影と待つ

小田　慶喜

老人者すがって歩く散歩道

つくつくボーシせわしげに鳴く

一色　ノブ

朝露をはらってわいた法蓮草

ゆでておひたしおいしく食べた

加藤　イサ子